
SS6__Merry Christmas without You

マジチョコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S S 6 | M e r r y C h r i s t m a s w i t h o u t
o u

【Nコード】

N 9 3 2 9 Z

【作者名】

マジチヨコ

【あらすじ】

クリスマスの夜。

ローズにとって、アリスと仲を違えていた事を後悔する夜。

アリスにとって、親友と絆を確かめ合う大切な夜。

そして、贈られる遠い空の下からの贈り物。

大切なあなたの居ない、クリスマス。

年の瀬も迫ったとある日。フロストは図書室でお目当ての人物の姿を見つけた。

「探したわよ、ローズ」

ちよつと足を早めて近づきながら声をかけるがローズは気付かない。窓際の席に座ったまま物思いに耽り夜空を眺めている。

「うん？ローズ！」

「何、フロスト」

「あ、ああ。ちよつと用事があつて……」

何だろう。フロストは一瞬、違和感を感じたような気がした。だが、それが何だったのか分からない。今、目の前に居るローズに違和感など全く無いからだ。

「どうしたのよ黙っちゃつて。私に何か用事があつたんじゃないの？」

その通りだった。ローズは不思議そうな顔で、フロストを見つめてくる。フロストは微妙に心に引っ掛かる何かを怪訝に思いながらも、ローズに用件を話す事にした。

「来週のクリスマスパーティーの事なんだけど……」

ローズの表情は動かない。

「ああ、その事ね。分かつたわ、後でアリスやノワール、ルビーも呼んで計画する事にしましょうか」

「そ、それでプレゼントの事とか、何を贈ったらアリスやお姉ちゃんが好きかな……」

ちよつとそっぽを向くようにしながら、それでもフロストは恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな表情で頬を染めている。

「そうね、相談に乗ってあげるわ。可愛い所、あるじゃない」

後ろの一言は、ローズなりのからかいの言葉で、フロストも「うるさいわねっ」と理解した上で返す。何だかんだで、この二人は似

た者同士と言う所があるのだ。

「ローズはもう用意したの、プレゼント。どうせアリスには毎年あげてるんでしょ」

「え、ええ。こっそり、気付かれないようにね。その方が面白いじゃない。アリスの驚いて喜ぶ顔を見るのが楽しいのよ」

「まただ。フロストはローズの顔をまじまじと見つめるが、いつも通りのローズが居るだけで何も変わった所など見当たらない。」

「こっそりって……ま、良いわ。じゃあアリスには黙っててあげる」
「助かるわ、フロスト。あ、もちろんアンタやノワールにも用意してあるから楽しみにしてなさい。とっておきよ、とっておき」

「へえ〜それは楽しみにさせてもらうわ」

にんまりと笑ってフロストは挑戦的な目をした。さながら、楽しませてもらうじゃないと言った感じで如何にも彼女らしい笑みで、感情表現だった。

「あ、先に行つてくれるかしら？もうちょっと調べ物があるからそれを済ませて行くわ」

ローズは片手を上げてフロストと別れた。フロストは足取りも軽く、図書室を去っていく。その後ろ姿を眺めながら、完全に見えなくなつた事を確認してローズの顔には苦笑いが浮いた。

「流石に、敏いわね。フロストは」

最も、アリスの前では完璧な自信があつてこそその苦笑いだった。

先程は一人で物思いに耽るあまり、遂、気を抜いていた所がある。

ごまかす為に少しだけいつもよりも、饒舌だった自覚がローズにはあつた。

彼女にとってクリスマスは、決して誰にも言えない心中複雑な時期だった。

Merry Christmas Without You

「るん、るん」

思わず鼻歌から歌いだしてしまいそうな程浮かれてアリスは部屋の飾り付けを嬉々として行っていた。装飾用のライトや銀紙のテープ、煌びやかな飾りつけが部屋を満たしていく。

「本当に、アンタは楽しそうね」

「そりゃあ、もっちろんだよ！クリスマスパーティーをやるんだよ。フロストは楽しみじゃないの？」

「そ、そりゃあ楽しみに決まってるじゃない」

満面の笑みで二日後に迫ったクリスマスパーティーに向けて部屋の飾りつけに勤しむアリスとフロスト。ローズやルビー、ノワールは当日の料理の材料の手配等で街へと出かけている所である。

「そう言えば、フロストはノワールへのプレゼントはもう用意した？」

「ええ、お姉ちゃん喜ぶわよ、きつと」

フロストは嬉しそうに笑った。ローズにも協力を要請して用意した、最愛の姉へのプレゼント。ノワールの前では照れくさくて素直になれない部分が未だにあるが、それは愛情の裏返しだとノワールも良く分かっていた。何より、周りから見ているそれは微笑ましい程。

「そう言うアンタはもう用意してるんでしょうね？」

「え、わたし？もちろんだよ。でも、ローズには内緒ね」

悪戯っぽく笑うとアリスはぺろっと舌を出して見せる。フロストにはそれだけで何となく察する物があった。そして、呆れて笑う。

「あっちはあっち。こっちはこっち、ね」

「何々？どうしたの？」

アリスはフロストのため息に興味を示すが、フロストはまるで意に介さないように、鼻で笑っただけだった。

「本当に、アンタ達はお似合いって言いたいだよ」

「?????どういう事、教えてよ」フロスト」

困惑気味に抱きついてきそうな所まで迫ったアリスの腕をひらりとかわす。もう何度も同じ事をされてきたので、いい加減にフロストもかわす術を身に付けた。最も、それは彼女に余裕がある時、わざと捕まっただけの時、を除いた場合になるのだが。

「ま、アンタが気にする事じゃないわ。それよりさっさと飾り付けをやっていくわよ」

「はい」

すぐにくろりと嬉しそうな表情に変わる。その笑顔を見ながら、フロストは心の中で温かく笑った。

本当にローズもアリスもお互い様、ね。

お互いに、差出人を隠してプレゼントを贈り合う。お互いに相手が誰なのか知っているのかもしれないけど、それを口に出す事は無い。不思議な、そして強い絆だとフロストは思った。

そう、フロストはそう思っていた。

「では、かんぱーい」

ベルガモット校長の挨拶でクリスマスパーティーは幕を開けた。

アリス、ローズ、ルビー、ノワール、フロスト、リュミエール、ベルガモット校長、それに、それぞれのパーティー達が集まる賑やかなパーティーだった。

街では、クリスマスはハロウィン程では無いものの、それぞれパーティーを開いたりパンプキンストリートがいつもより派手な電飾で飾られたりとお祭りである事には変わりはない。

アリスの家は広がった。最近のアリスはそれを寂しいとか心細いとか言う事は無かったが、それでも偶にこうして彼女の家をパーティーの会場にしたりする。その事を提案したのは他でもなく、ロー

ズだった。

「ちよつと！この馬鹿犬、返しなさいよ！」

フェンリルがフロストのプレゼントを啜えて逃げて、それを追ってフロストが駆け回ったりとか。

「いえーいつ、皆でプレゼント交換会！」

と事前にアリスが提案していたプレゼントの交換会が行われたりとか。

「歌います……」

とアリスに促されたノワールが皆の前で歌ったりとか。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎて行った。

がちやりと背後の音でローズは顔だけをそちらへ向けた。少しはしやぎ疲れたローズはバルコニーで夜風に当たっている所だった。

「ローズ！メリークリスマス！」

アリスが片手にグラスを持ったまま、バルコニーへ顔を出す。中身はもちろんジュースだ。

「何よ、改まって。メリークリスマス、アリス。本当に、アンタはいつも元気ねえ」

ローズは手すりに身を預けて顔を元に戻して外へと目をやる。遠目に街の明るい光が見えた。

「だってクリスマスだよっ！なんかわくわくだよねっ！あ、ローズの家にサンタさん来た？」

アリスは言葉通り期待に胸を膨らませた満面の笑みだ。

「！？き、来たわよ。今年も素敵なプレゼントをくれたわ……」

まさか直接聞かれるとは思ってもしなかった。アリスにとって、サンタに扮したつもりでローズにこっそりと贈るプレゼントは、先程のプレゼント交換会とは別だと言う計算のようだ。

思えば、当り前、か。

昔からアリスはローズにクリスマスプレゼントを贈り続けていた。二人が仲違いしていた頃もアリスはローズに正体を隠してプレゼン

トを贈り続けた。そして、アリスの家にも、差出人不明のプレゼントが毎年届くのだ。

ローズは、正体を隠してプレゼントを贈りそれを受け取る自分を見る事で喜ぶアリスを見るのが嬉しかった。

「えへへ〜。そっか！よかったねえ〜！」

そう、この表情を見るのがローズにとって、何物にも代え難い物なのだ。今、手を伸ばせば届くその笑顔。ぎゅっと右手を握る、固く固く握りしめる。

「そういうアリスの家にはサンタさんきたの？」

いつも通りの自分の声が出たと思った。

「うん！今年も来てくれたよっ！サンタさんって不思議だよね！なんで欲しい物がわかるんだろ？」

アリスはちよつと考え込むようにしたが、いつもの仕草よりも若干わざとらしいような気がローズにはした。

「そうね、不思議よね……」

「いつか直接お礼いいたいなっ！」

アリスはちよつと照れたように、それでも彼女のいつもの真っ直ぐさは微塵も失わないままそう告げた。

「そうね、いつか……きつと、いつか出来るわ」

ローズは思わずアリスを抱きしめた。今の自分の表情を見られたくないからなのか、それとも、罪悪感からか。

「ローズ……？」

物の数秒、だが、ローズにとってその時は永劫のように長く、アリスにとっては刹那、ローズはゆっくりとアリスを離す。

「大切にしなさいよ、そのプレゼント！」

ウインクしてみせるローズに不思議そうなアリスの表情はぱつと明るくなる。それこそ、今の抱擁がとても嬉しかったのか、いつもよりその笑顔は明るく眩しい程だ。

「うんっ！」

「さて、そろそろ戻るわよ。またフロストがフェンリルとグレイス

に苛められているかもしれないわね」

「あ、待ってよー！」

ローズはこっそりと仕舞っていた小箱を手に取り、マントに隠すように弄ぶ。

毎年用意する、アリスへのプレゼント。そして、とある年から渡せなくなったプレゼント。アリスは覚えていない、彼女にこっそりと贈られていたプレゼントが最初は二つあった事を。

何故ならアリスはずっとそれが全てローズからの贈り物だと思っているからだ。二つともローズからの贅沢なプレゼントだと。

二人が仲違いしている間もずっとローズにプレゼントを贈り続けたアリス。そして、ずっとアリスに贈られ続けた差出人不明のプレゼント。

ローズはそれが誰からのプレゼントなのかは知らない。だが、不思議な事に、記憶の彼方に思い当たる人がいるような気がする。彼女はそれを、否定する気にはなれなかった。

何処か遠い楼閣。

彼女は、鉄格子に手を掛けて暗い空を見上げる。

「メリークリスマス……アリス」

声は、今はまだ届かない。

(後書き)

マジカルハロウィン妄想と言う名のSS第六弾！

親世代から一気に久しぶりに現代へ戻って見たのですが、いや〜、意外とキャラが動いてくれなくて困りましたw

特にアリスが動いてくれないのには驚いた(苦笑)

セシルさんと同じ要領なのに、やっぱり違うキャラなんだな〜としみじみ。

そして、フロストの動かしやすさは最高です。

物語自体はシリアスですが、まあ、色々と深読みしてみたらこうなつたよって自分の脳内妄想なのでご勘弁ください。

ローズさんはアリス大好きだから、葛藤とかありそうですね。

今回もお粗末の文章に付き合っただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9329z/>

SS6__Merry Christmas without You

2011年12月29日03時10分発行